令和 5 年 4 月のおたより

「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」。誰もが知る松尾芭蕉「おくのほそ道」の一句。小学生のころ、担任の先生が国語の時間にこの句を取り上げて、自分がイメージする情景を絵にかいてきなさいと宿題を出しました。そこで自分は森の中の木々や岩々にたくさんの（100 匹ぐらい？）セミがとまってけたたましく鳴いている様子を思い浮かべ描いていきました。先生はその絵を見て苦笑しながら、努力したことをほめてくれました。本当は、セミは 1 匹ぐらいで、あたりに森閑とした静けさが漂う様を描けばよかったようなのです。

近年俳句が幅広い世代に広がり、愛好家の裾野を広げている立役者のひとりが俳人・夏井いつきさん。ある新聞のインタビューに答えて「俳句って、なんかすごいものを自分の奥から引っ張り出して、外に叫ぶみたいに思い込んでるけど、本当はそうじゃない。俳句のタネは、小さな出来事や発見、面白いと思うもの、好奇心のアンテナをくすぐられたものにある。自分の外に材料がある」と。最近の著書の中では「苦しい出来事に直面するたびに、俳句によって救われてきました。（中略）俳句にすることで自分を俯瞰して、一歩前に踏み出すきっかけとなります。悲しみやつらさを客観視することで心の痛みを和らげてくれるのです。まさに、『俳句ある人生に退屈とムダはなし』なのです」（『夏井いつきの＜今日から一句＞』／第三文明社）とも語っています。

仏典に「言と云うは、心の思いを響かして声を顕す」とあります。言葉というのは、良くも悪くも、そこに心の思いが込められた響きがあるということ。たとえ短くても真心こもる言葉は、必ず相手の心を動かす。だからこそ言葉を声に表す前に大切なのは、ものごとを曇りなく映しだす素直な心なのだ、ということです。

夏井さんに啓発され、一句詠んでみるかとしばし黙考し、できた句のあまりの凡庸さにすぐ挫折。「初心者は、俳句をひねり出そうとするうちに“凡人の穴”に吸い込まれてしまう、つまり他人と同じ発想、同じ言葉になる」のだそうです（同書から）。　（K）

記

＜4 月度学習会＞

・日時：4 月 30 日（日）13：30～　（菜の花ホール）

・「8050」将来の不安を軽くするためのヒント・・・館山市社会福祉協議会

高齢化が進み、誰もが先を見通せない状況にあります。親亡き後の不安や介護、第三者とのつながりがないことなど、様々な不安を漠然と抱えながらも時間だけが過ぎていく。それらを口に出して話し合えない家族。どこに相談していいかもわからない。そうした問題について、事例を通して専門家がお答えします。

・グループミーティング

参加資格：ひきこもり当事者およびそのご家族。

当日のご出欠をあらかじめご連絡ください。090-2335-1338 加藤＝ショートメール可